薔薇姫―story of the black rose―

夜兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薔薇姫―ｓｔｏｒｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｂｌａｃｋ　ｒｏｓｅ―

【Ｎコード】

Ｎ１７１１Ｅ

【作者名】

夜兎

【あらすじ】

薔薇戦争（ローズゲーム）――それは美しき薔薇達の血塗られた戦い。飛び交う銃弾、舞い散る鮮血。生き残るのは誰？“姫”と呼ばれた運命（さだめ）の少女達の儚く哀しい物語が今、始まる。※１～１３部を大幅に書き直しました。改名しました（元　有栖川咲）。（１１／１７）

序章

ふたつの世界が交わりし時、物語は幕を開ける

導くは血塗れの騎士

誘(いざな)われしは憐れな少女

穢れなき白は鮮血の紅(あか)に染まり

人々は散りゆく薔薇に狂喜する

さぁ残酷劇の始まり始まり

＋―…＋†＋…―＋

時計の針が四時を指し示したのと同時に、校内に鳴り響くチャイムが退屈な授業の終わりを告げた。教室はざわめきだし、女生徒達の華やかな笑い声で満たされていく。窓からは夕日が射し込み、校内を優しい朱(あか)に染めた。今日も穏やかな放課後が訪れる。

「ごきげんよう」

軽く挨拶を交わし、ひとり、またひとりと女生徒達は教室を後にする。私も教科書や筆箱を鞄の中に詰め込み、帰り支度を始めた。

「アンジェ、帰ろ」

少し上の方から聞こえた声に顔を上げると、机の前に柔らかな笑みを浮かべた栗色の髪の少女が立っていた。美しい琥珀色の瞳を細め、上品に微笑む姿はいつ見ても素敵だと思う。彼女はロゼッタ＝スノードロップ。愛称はロゼ。私の幼なじみであり、親友でもある。ロゼとは家が近く、その上、私達が通うこの女学園は幼稚舎から大学までエスカレーター式だから彼女とは物心ついた頃からずっと一緒だ。

因みにこの学園は俗に言うお嬢様学校ってやつで、校内での挨拶は『ごきげんよう』。マナー、身だしなみに厳しく、幼稚舎に通っていた頃から礼儀作法を叩き込まれてきた。高等部に上がった今でも週に一度、礼儀作法について学ぶ授業がある。

「ロゼ、ちょっと待って。すぐ準備するわ」

残りの荷物を鞄に詰め込み、椅子から立ち上がると私はロゼと共に教室を後にした。

†

夕暮れの中、たわいないお喋りを交わしながら通い慣れた道を歩く。時折吹く風が私達の髪をふわりと揺らした。いつもなら比較的人通りの多いこの時間帯。だけど、今日は誰ともすれ違うことなく、赤みがかった街には私達の声と足音だけが響いていた。

歩き始めて数十分。白を基調とした家と色とりどりの花が咲く美しい庭が姿を現す。あれがロゼの家。幼い頃、幾度となく遊びに行った。勿論今だって彼女の家にはよくお邪魔させてもらっている。

家の前で私達は互いに手を振り、別れの挨拶を交わした。彼女を見送り、私は再び歩き出す。次の十字路を右に曲がり、そこから少し歩けば、私の家だ。

十字路はすぐそこ。家まで後少し。帰ったら何をしようか。そんなことを考えながら十字路を曲がったその時だった。私の瞳に妙な人影が映った。その人はこちらに向かって来ているようで、私達の距離は徐々に縮まっていく。近づくにつれ、ぼやけていたその姿がはっきりとしてきた。

見慣れない青年だ。銀髪に黒縁の眼鏡。分厚い生地の白いコートを羽織り、腰に剣を差したその姿はまるで御伽噺の騎士のようだった。こんな街中にその姿はあまりにも不釣り合いで、彼の存在だけ浮いて見える。

――変わった人。そんなことを考えながらすれ違い際にチラッと青年を見ると眼鏡の奥の銀灰色の瞳と視線がぶつかった。冷たく鋭い瞳。スッと細められたその双眼に言葉では言い表せない程の恐怖を感じた私はすぐさま視線を外し、足早に青年の横を通り過ぎた。その時――。

「……黒薔薇姫、アンジェリカ＝ローゼンノワールだな？」

私の耳に届いた低い声。その声に私は足を止め、振り返ってしまった。振り返らずにはいられなかった。

――何故って？

『アンジェリカ＝ローゼンノワール』、紛れもない私の名前。前半の言葉の意味はよくわからなかったけれど、青年は確かに私の名を口にした。彼が知るはずのない私の名を。そして、振り返った私が目にしたのはあまりにも信じ難い光景だった――。

鞘から引き抜かれた剣（つるぎ）。青年の右手に握られたそれは明らかにオモチャなどではなかった。鋭く光る刃。獲物を狙う銀灰色の瞳。その視線の先にいるのは、私……？

考えるよりも身体が先に動いていた。全身に駆け巡る恐怖。弾かれたように駆け出した私。咄嗟に逃げ込んだのは薄暗い路地裏だった。

振り向けど青年の姿は見えない。されど沈黙する街に響くひとつの足音が着実に私を追ってきている。腰まで伸びたブロンドを振り乱

し、制服のスカートを翻しながら私はただ前へと進んだ。

もう何度目かになる曲がり角に差し掛かったその時、私は足を止めた。私の青い瞳に映る煉瓦造りの塀。自身よりも高いそれが私の行く手を完全に遮っている。走って走って、辿り着いたそこは行き止まり。だけど、引き返すことなんてできない。足音は未だに私を追って来ているのだから。

――戻れないなら進むしかないじゃない！

私は塀に手をつき、無理矢理それをよじ登り始めた。はしたない、なんて怒られそうだけど、今はそんなこと気にしていられない。

「きゃッ！」

よじ登った、まではよかった。しかし、着地失敗。バランスを崩した私は、重力に逆らえず、そのまま落ちるように塀の向こう側へ。

そこはどこかの空き地に繋がっていたようで、長い間手入れがされていないであろう伸び放題の草花が眼前に広がる。落ちた先が固いコンクリートの上でなかったのは不幸中の幸いかもしれない。それにしてもここはどこなのだろう。見知らぬその場所に不安が募る。それ程遠くには来ていないはずだから私の家の近くであることは間違いないと思うのだけど……。家の近くとはいえ全てを把握してる訳ではないし、無我夢中だった私は自分が走って来た道すらよく覚えていない。

――…考えたところでわからないものはわからないのだから仕方ないじゃないか。適当に進めばどこか知っている道に出られるかもしれない。とにかく早く家に帰りたかった。家の中に入り、鍵をかけてしまえばきっとあの人も追っては来られないから。

取り敢えずここから移動しようと、手についた泥を払い落とし、立ち上がろうと足に力を込めたその時だった。

「痛ッ」

左足首に鈍い痛みが走った。そっと触れるとそこは僅かに熱を持っている。先程の着地の際に痛めてしまったのだろう。しかし、いつまでもこんな所に座り込んでいる訳にもいかない。私は塀に手をつき、それを伝うように立ち上がった。

「……？」

不意にガサッと草の揺れる音が聞こえた。音がした方を見やると、空き地の隅にひっそりと佇む大きな木の陰に人の姿を捉えた。

――誰かいる！　そうだ、あの人に道を聞こう！

不安だった。刃物を持った見知らぬ男に追い掛けられ、知らない場所に迷い込み――。ひとりぼっちでとても不安だった。だから、人がいたことに私は安堵した。怪我をした私を助けてくれるかもしれない、そんな期待さえ抱いた。

痛む左足を引きずりながらその人影に近づく。声を掛けようと口を開いたけれど、木の陰から現れたその人を見た瞬間、言葉は失われ、代わりに短い悲鳴が漏れた。

「な、なんで……！」

震える声で漸く絞り出せた言葉はそれだけだった。感情の籠もらぬ

冷たい銀灰色の瞳と視線が交わり、びくりと肩が震える。足音はずっと私の後ろを追って来ていたはずなのにどうして……！　いつの間に回り込まれてしまったのか、現れたその人はあの銀髪の青年。パニック状態の中、視界の端に映った鈍色の刃に、逃げろ、と頭の中で警報が鳴る。

――どこに逃げればいい？

――そんなのわからない！

とにかくこの青年から離れようと、身を翻し、足を踏み出した。しかし、自由にならない左足。痛みに足がもつれ、私は豪快に転んでしまった。

「鬼ごっこは、終わりにしようか」

低く響いたその声に顔を上げると、私の瞳に鋭く光る剣（つるぎ）を振り翳す青年の姿が映った。冷たく見下ろす双眼。私を狙う刃。どうして私がこんな目に遭わなきゃいけないの？　その答えもわからぬまま、襲い来る恐怖に私は動くこともできず、ただきつく目を閉じた。

キンッ

金属音が空気を震わせる。覚悟した痛みはいつまで経っても感じる

ことはなかった。不思議に思った私は恐る恐る目を開ける。

「えっ――？」

その光景に驚いた私は、言葉をなくし、大きく目を見開いた。いつの間にか現れたふたりの青年。その内のひとりが私目掛けて振り下ろされた剣を身の丈程もある大剣で受け止めていた。もうひとりの青年は、銀髪の青年に銃口を突き付け、怒りの色を映した瞳で彼を見据える。漆黒の髪に漆黒の瞳。羽織っているそのコートもまた漆黒で。銀髪の青年とよく似た身なり、されど対照的なふたり。

「――僕らがお相手しましょう。覚悟はいいですか？」

彼は銃口を銀髪の青年に向けたまま低くドスの利いた声を響かせる。私に向けられている訳じゃないのに、殺気の込められたその声にビクッと肩が跳ねた。

銀髪の青年に向けられるあからさまな殺意。それなのに彼は眉ひとつ動かさない。

「……黒薔薇、か。……分が悪いな」

銀髪の青年は小さくそう呟くと、甲高い金属音を響かせ、しなやかな動きで大剣を弾き、後ろへ飛び退いた。彼がパチンと指を鳴らしたのを合図に空間に亀裂が生じる。彼は迷うことなくその亀裂に飛び込み、姿を消した。その亀裂は彼を飲み込むと跡形もなく消えてしまった。あまりに衝撃的なその光景に私は動くことができず、時が止まってしまったかのようにただ一点を見つめる。瞬きすら忘れてしまった。

「大丈夫ですか？」

動かない私を横から誰かが覗き込む。声の聞こえた方を見やると優しげな漆黒の瞳と視線がぶつかった。私に話し掛けるその声色は先程のそれとはまるで別人のように優しく柔らかい。立てますか、と差し出された右手に私は躊躇いながらも自分の手を重ねた。しかし、立ち上がろうとしたその瞬間、ふと腰のホルスターに収められた銀色の銃が目に留まった。フラッシュバックするあの光景。殺気に満ちた彼の声が頭の中で反響する。

「ひっ……！」

短い悲鳴を上げ、私は思わず青年の手を振り払った。中途半端な体勢だった私は、その反動で後ろへよろめく。

「危ねぇな」

倒れそうになった私の身体を支えてくれたのはもうひとりの青年だった。見上げれば、安心感を与えてくれるような屈託のない笑顔を返してくれる。だけど、私は彼の背中に背負われた大剣の存在ばかりが気になって仕方がなかった。

「大丈夫ですよ。僕達は貴女を傷付けるようなことはしませんから」

完全に怯えきった私に銃を持った青年は苦笑いを浮かべた。

「では、姫、僕らもそろそろ行きましょうか？」

そして、唐突にそう言い出した。それは明らかに私に向けられた言葉だったけれど、私にはその意味を理解することができない。否、

理解したくなかった。

「ちょっと待ってッ！　一体どこに行くって――っきゃあ！」

大剣を背負った青年に後ろから軽々と持ち上げられ、私の言葉は遮られた。パチンと指が鳴り、先程と同じように空間に亀裂が生じる。

「ゃッ……！」

色々言いたいことはあったけれど、私の唇から漏れたのは言葉にすらならない小さな声だけ。青年は私を抱えたまま迷うことなくその亀裂に飛び込んだ。抵抗すらできずに私は彼らと共に深い闇の中へ墜ちていった――。

第一章　?. 黒薔薇の街

墜ちているのか、浮いているのか。

どちらが上で、どちらが下か。

深い深い黒に支配された世界。終わりの見えない闇が広がる。何も見えない。何も聞こえない。だけど、誰かが私をしっかりと抱えてくれている。深い闇の中で、その感触だけが私の心を落ち着かせてくれた――。

†

晴れ渡る空。沈みかけていたはずの太陽は高く昇り、爽やかな青がどこまでも続く。

「えっ……？」

一体何が起こったというのだろう。気が付くと、そこはどこか知ら

ない街の広場だった。広場の中央には、小さいながらも繊細な装飾が施された噴水があり、そこから噴き出される水が美しい弧を描いている。

とても綺麗な街だった。だけど、どこか異様な雰囲気を感じた。建ち並ぶ家は煉瓦造りの可愛らしいデザイン。統一性があり、自分勝手な建物がゴチャゴチャと並ぶ街なんかよりずっと綺麗。そんな物語の一節にありそうなこの街のどこか異様なのかって？

それは――薔薇。誇らしげに咲く薔薇のひとつひとつはとても綺麗なのだけど、その数は異常な程多く、その全てが漆黒の花を咲かせている。無数に咲き乱れる黒薔薇が美しいこの街を異様ものに変えていた。

ここはどこなの？　何が起こったの？　常識では考えられないことばかり。驚愕と困惑が頭の中をぐるぐる回る。

「……ど、こ……？」

「ここは華の国、黒薔薇の領土です」

殆ど呟きに近かったそれに答えてくれたのは、銃を持った青年だった。しかし、私にとって彼の言葉は非常に理解し難いものだった。ふざけているのか、からかっているのか、はたまた私の聞き間違いか。『はなのくに』なんて聞いたことがない。

「あの……、今なんて……？」

「ここは、華族（はなぞく）と呼ばれる者達が暮らす華の国。そして、今僕らがいるこの場所は黒薔薇族の領土です」

「……頭、大丈夫ですか？」

パッと両手で口を押さえたけれど、時すでに遅し。出てしまった言葉は戻らない。さすがに今の発言はまずかった気がする。まだ相手がどんな人だかよくわからない上に彼は銃を所持している。怒って発砲なんてことがないとは言い切れない。見た目は穏やかそうだけど、人は見掛けによらない。現に銀髪の青年に銃口を向けていた時の彼は別人かと思うほど怖かった。

「やだな、僕は至って正常ですよ。ここは、そうですね……姫から見たら異世界っていうんでしょうか？　僕らの世界と姫の世界は遠くて近い存在なんです。まぁ、詳しいことは城で説明しますよ」

穏やかな笑みを浮かべ、青年はそう言った。その言葉に私は眉を顰める。

だって、異世界って何？　勿論『異世界』って言葉は知っている。意味だってわかっている。でも、それは想像の世界。所詮は作り話。異世界が存在するなんて本気で言う人はきっと頭がいかれてる。異世界なんて存在しない。それが常識。それが現実。

でも、否定しきれないのもまた事実。そう、今の私には。異世界なんてあり得ない。だけど、それ以外に今の状況を説明できるものがない。

不安、動揺、焦燥。行き場のない思いが私を支配していく。ぐるぐる、ぐるぐる。それは終わりのない迷路のように――。

「！」

ひとり悶々としていると、突然身体が浮いた。一瞬何が起こったのかわからず、自分が抱え上げられたのだと気付くのに少し時間を要した。

「ま、待って！　待って！」

私を抱えたまま歩き出そうとした青年に慌てて制止の声をかける。先程の会話から、彼の言う“城”へ向かうつもりなのだろう。しかし、随分と物騒なものを所持した得体の知れない人間に素直にのこのこついて行く程私も馬鹿じゃない。

「何者かもわからない人達とこれ以上、どこかへ行くつもりなんてありません！」

強めの口調で私ははっきりそう言った。家へ帰して、勿論そういう意味を込めて。それなのに彼らから返ってきたのは私の期待とはまるで違う答えだった。

「ああ、すいません。申し遅れました。僕はユノ＝アルフォード。以後お見知り置きを、アンジェリカ嬢」

「俺はアシル＝ランドール」

「いや、名乗ればいいっていう問題じゃ――」

そこまで口にして私はふと気が付いた。

「なんで、私の名前を……？」

銃を持った青年――ユノは確かに私の名を口にした。あの時と、銀髪の青年とすれ違ったあの時と同じ。私の中に漠然とした恐怖心が生まれる。――どうして？　初対面のはずなのに。名乗った覚えなんてないのに。

「あんたが黒薔薇姫だからだよ」

答えてくれたのはユノではなく、大剣を背負った青年――アシル。彼の言葉に恐怖心は疑問へと変わる。

「あの……『黒薔薇姫』って一体……？」

“黒薔薇姫”

あの時は大して気にも留めなかったけれど、確か銀髪の青年も私のことをそう呼んだ。それなりに裕福な家庭で何不自由なく過ごしてきたけれど、私は『姫』なんて呼ばれる程高貴な身分じゃない。この国のことだって何も知らないのに、彼らは何故、私のことをそう呼ぶの？

「城で全て説明しますよ」

ユノはそう言うと、私を抱えたまま有無を言わさず歩き出す。必死の抵抗もあまり意味をなさず、黒薔薇の街に私の制止の声が虚しく響いた。

†

降ろして、と何度かお願いしてみたけれど、ユノは断固として私を降ろそうとはしなかった。結局城までお姫様抱っこのまま強制連行され、やっと降ろして貰えたのは城の大扉の前だった。大扉には交差した二本の剣に薔薇が巻き付いたレリーフが施されている。目の前に聳え立つ城は美しく迫力があった。ここに来るまでに通った城の庭も絵画のように美しかった。街といい、城といい、まるで御伽噺の世界。絵本の中に迷い込んだような気分になる。

「姫、中へ」

差し出される右手。一瞬、その手を振り切って逃げてしまおうかとも考えたけれど、怪我をしたこの足で彼らを振り切れる自信など到底なく、私は意を決してその手をとった。扉は音を立て、煌びやかな城内が徐々に姿を現す。ユノに手を引かれ、私は遂に城の中へ足を踏み入れた。

「「お帰りなさいませ」」

綺麗に重なる声。私達を出迎えたのは深々と頭を下げるふたりの少女だった。お揃いの黒いワンピースに白いエプロン。その出で立ちから彼女達がこの城のメイドであることは容易に想像がついた。

「お待ちしていました、黒薔薇姫様」

「さぁ、こちらへどうぞ」

少女達は私を城の奥へと促す。不安げな瞳で見上げる私に、ユノは大丈夫だと言い聞かせるように小さく頷いた。そして私は、拭いきれない不安を残しつつも、一旦彼らと別れ、少女達と共に城の奥へと進んだ。

この時はまだ知らなかった。私を待ち構えているものがあまりにも残酷な運命だということを――。

?. 宿命の姫君

右へ左へ。
どこまでも続く廊下はまるで迷路。城内は思った以上に広く、今私がいるこの部屋に辿り着くまで思いの外時間がかかった。

通された部屋はやけに広く、無駄に豪華。立派過ぎるその部屋はまるで王族の部屋。……と言っても王族の部屋なんて見たことがないから私の勝手なイメージでしかないのだけれど。部屋に入ると私はすぐに椅子に座らされ、簡単な手当てを受けた。軽い捻挫だったらしく、すぐに良くなるだろうと告げられた。

手当てを終えた今、このだだっ広い部屋にいるのは私ひとり。メイド達は手当てを終えると私に一着のドレスを渡し、ユノとアシルが後程迎えに来ることを告げ、部屋から出て行った。私は渡されたドレスを広げ、かれこれ数十分程それと睨めっこを繰り返している。何故私がそんなことをしているのか。その原因はこのドレスのデザインにある。黒を基調としたそれはフリル、レース、リボンが多用され、色こそ落ち着いているもののデザインはかなり少女趣味なものだった。ドレスの他に黒のブーツとこれまたレースたっぷりのヘッドドレスも渡されている。

可愛い。とても可愛いのだけれど、これを着るのは少々抵抗があった。普段着というよりは衣装に近い。着替えるよう直接言われた訳ではないけれど、ドレスを渡したということはやはり着替えろという意味なのだろう。お城ではそれ相応の格好をしなくてはいけないのだろうか。そんなことを考えていると不意に誰かがドアをノックした。コンコンと小気味の良い音が響く。

「はーい」

ドアを開けるとそこにはユノとアシルの姿があった。

「おや、着替えはまだお済みでないですか？」

出逢った時と変わらぬ私の身なりにユノは首を傾げる。やはりあのドレスに着替えるべきだったようだ。

「ごめんなさい」

すぐ着替えるから、と私はくるりと踵を返し、部屋の中へと引き返す。しかし、扉を閉めようとしたところをやんわりとユノに引き止められた。

「いえ、着替えは後程で構いません。先にお話ししたいことがあります」

†

「どうぞ」

スッと椅子が引かれ、そこへ座るよう促される。ユノとアシルに連れられ、私はまた別の部屋へと通された。落ち着いた雰囲気のよく整理されたその部屋はユノの自室だそうで、私が最初に通された部屋程広くはないものの一般的なそれと比べたら十分過ぎる程広いと思われた。話とは何だろうか。私が緊張の面持ちで見つめる中、ユノがゆっくりと口を開いた。

「姫、単刀直入に言います」

どくんと心臓が脈打つ。ジッと彼を見据え、私は次の言葉を待った。話の内容が気になる一方、聞くのが怖い、そう感じている自分がいた。不意に生まれたその恐怖心はきっとこの重々しい沈黙のせい。

「……貴女には薔薇戦争（ローズゲーム）に参加して頂きます」

「……ろーず、げーむ……？」

聞いたことのない言葉に私は幼子のようにそれを繰り返す。きょとんと首を傾げる私に今度はアシルが口を開いた。

「簡単に言えば権力争いだよ。互いの姫を殺し合うんだ。武器は何を使おうが自由。どんな手を使っても構わない。最後まで姫が生き残った一族の勝ち。単純だろ？」

「……えっ」

言葉が出て来なかった。恐怖からではない。彼の言葉に実感が持てなかった。殺し合い、それは平和な毎日を過ごしてきた私にとって余りにも無縁の言葉だったから。アシルの言う“姫”が自分を指し

ていることは理解できたが、まるで他人ごとのように思えた。しかし、そう思えたのも束の間、不意にあの銀灰色の瞳が脳裏をよぎった。殺されかけた事実。アシルの言葉が急に現実味を帯びる。それを認めた途端、サッと血の気が引いた。

殺し合い、自分の中で繰り返されるその言葉を振り払うかのように、私は目の前のテーブルにバンッと手をつき、勢い良く立ち上がった。その反動で椅子が倒れ、派手な音を立てる。何か訴えようと口を開いたが、交錯する様々な思いが浮かんでは消え、また浮かんでは消え、ただそれを繰り返すばかりで、結局は何も言うことができなかった。突然立ち上がった私にユノとアシルは一瞬驚いた様子を見せたが、そんな私の行動も想定の範囲内だったのか、ふたり共特に慌てた素振りなどは見せなかった。

「すいません。いきなりこんな話をされても困りますよね。これから詳しい話をさせて頂きますので」

ユノは私の傍へと歩み寄ると、倒された椅子を起こし、そこへもう一度座るよう促した。思考がままならない私は彼に従う他なく、素直にその椅子に座り直す。それを確認するとユノは再び口を開いた。

「少し長くなると思いますが、聞いて下さい」

＋―…＋†＋…―＋

もう既に話したことですが、ここは姫の世界とは全く別の世界。姫から見ると異世界ということになりますね。と言っても華の国と人間界に全く繋がりがないという訳ではないのです。『狭間』と呼ばれる場所によってふたつの世界は僅かですが繋がっています。

あの暗闇がそうなのかって？　いえ、あれは只の通り道です。姫と僕らが出逢ったあの街が狭間と呼ばれる場所です。姫が幼い頃から住んでいる街とよく似ていたかもしれませんが、あの場所こそが狭間なんです。狭間は、はっきりとした形を持たないんですよ。常に変化し続ける場所なんです。あの街にいたのは僕らと姫、そして白薔薇。他に人影はなかったでしょう？　これが何よりの証拠です。あの時、狭間が姫の住んでいる街の姿をしていたのは、姫が無意識の内に迷い込んだためでしょう。そして、狭間を通って華の国と人間界を行き来することができるのは、薔薇族だけなんです。ここまではわかりましたか？

それではそろそろ本題に入りましょうか。ローズゲームとは何か、なぜ貴女が参加しなくてはいけないのか、お話します。

華の国には様々な種族の者達が暮らしています。そして、この華の国を治めているのが僕ら、薔薇族です。薔薇族は紅、青、黄、白、黒の五つの一族に分かれています。各一族の中から有力者をひとりずつ出し合い、その選ばれた五人の有力者を中心に政治を行ってきました。わかりづらいですか？　簡単に言えば王様が五人いるようなものです。

これから少し昔話をしますね。えっ？　唐突じゃないかって？　細かいことは気にしないで下さい。

王が五人もいれば、時に意見の食い違いが起きてもおかしくありませんよね？　意見の食い違いがやがて争いに発展し、ついには薔薇族内で内戦が起こってしまいました。争いが静まる気配は全く感じられず、内戦は激しくなる一方。国民は動揺し、国の均衡は瞬く間に崩れていきました。

そんな絶望的な状況の中、争いを鎮めようと立ち上がった方々がいらっしゃいました。その方々が先代の薔薇族の姫君方。紅、青、黄、白、黒の５人の姫君は手を取り合い、懸命に説得を続けました。しかし、誰ひとりとして彼女達の言葉に耳を傾けようとした者はいなかったのです。嘆き悲しんだ姫君は狭間を通り、人間界に姿を消してしまいました。

必死の捜索が行われましたが、姫君は誰ひとりとして見つかることはありませんでした。そして、最悪なことに姫がいなくなってしまったのはお前のせいだ、と責任を押し付け合い、争いは更に激しさを増してしまったのです。

このままでは国が壊滅してしまう。そこで提案されたのがローズゲーム。姫君の生まれ変わりの少女をこちらに招き、殺し合い、最後まで生き残った一族に最高権力を与える。有力者達は、姫君の生まれ変わりが誕生するまで休戦とすると、そして、姫君の生まれ変わりが揃った時、この戦いに終止符を打つと、宣言しました。

＋―…＋†＋…―＋

「……時代は巡り、ついにその日を迎えてしまった訳です」

「……うそよ……」

私は小さく呟いた。思考がついていかず、言葉が出て来ない。この一言が今の私の精一杯だった。

「先程も話しましたが、狭間を通ることができるのは薔薇族のみ。普通、人間は華の国に来ることはできないんです。姫でなければ貴女は今、ここにいるはずがありません」

これが夢ならどんなに救われただろう。うそよ、もう一度呟いたその声は情けない程震えていた。

彼らの話からすれば私以外に姫の生まれ変わりは後四人。その中で生き残れるのはたったひとり。突然突きつけられた殺人ゲーム。そこに私の意志など存在しない。余りにも理不尽に思えた。

「……そんなの、身勝手だわ……」

次の瞬間、一粒の涙が零れた。それは堰を切ったように次々と溢れ出し、私の頬を濡らしていく。

「大丈夫だって！　俺らがしっかり護ってやるから」

励ますようにアシルが私の肩に触れた。大丈夫、護ってやる、アシルは明るく振る舞ってみせるけど、今の私には何の気休めにもならず、ただ頬を伝う涙を拭うことしかできなかった。

他の誰かを犠牲にしてまでも生き抜くか、自ら破滅の道を選ぶか。あなたならどちらを選びますか？

歯車は大きく狂い始めた。いや、初めから歪んでいたのかもしれない。

さぁ、ゲームを始めよう。悪夢という名のゲームを――。

?. 残酷劇の幕開け

ゲームには必ずルールがあります。

貴女が参加することもルール。

途中でやめてはいけないこともルール。

ルールは守らなくちゃいけないものですよね？

賢い貴女ならもうおわかりでしょう？

どんなに足掻こうと逃げることなどできはしないのです。

＋―…＋†＋…―＋

目の前に大きな地図が広げられる。ユノは私が落ち着いてきた頃を見計らい、ローズゲームのルールについて話し始めた。

「ここが黒薔薇の領土、今僕らがいる場所ですね。これらが他の薔薇族の領土、この辺り一帯が他の種族の領土。そして、ここがローズゲームの行われる場所です」

ユノの長い指は地図の上を滑るように移動し、最後にこの地図に描かれている中で最も広い場所を指差した。

「ここは華の国で最も広い森で、唯一誰の領土でもありません。ゲームはここで行われます。五日後の日没までにここに移動し、ゲームが終わるまでこの森から出ることは許されません」

「日没が始まりの合図ってこと？」

「いや、ゲームはもう始まってるぜ。そうじゃなきゃジャンの行動はルール違反になる」

「……ジャン？」

聞き覚えのない名前に私は首を傾げる。予備知識のない私にとって、時に彼らの話は言葉足らずだ。

「ジャン＝カルヴァート、狭間にいたあの銀髪の男です。もし五日後の日没が始まりだとしたら、彼はまだ他族の姫君に手を出すことは許されません」

私の問い掛けにすかさずユノが応える。しかし、それでも私には説明不足で、いまいち納得のいかない表情を返すと、彼はすぐにそれを察したようで再び口を開いた。

「まず、ローズゲームには各一族、姫君、正確に言えば先代の姫君の生まれ変わりと代表の騎士ふたり、計15人が参加します。勿論、黒薔薇族の代表騎士は僕とアシル。ジャンは白薔薇族の代表騎士です。そして、代表騎士が姫君を華の国までお連れするのもゲームの内なんです」

そこまで聞いて漸く彼らの言おうとしていることがわかった。だけど、そんなの勝手だ。だって――。

「つまり、途中で他族のお姫様を見付けたら殺っちゃっても構わないってこと」

アシルが話に割って入る。表情を変えず俯く私に、まだ説明不足だと勘違いしたらしい。ユノが気を使って遠回しに言ってくれたであろうそれをアシルははっきりと言葉にした。

「……勝手な話ね」

「でも、これがルールだ」

思わず零れた呟き。それに応えたアシルの言葉が妙に腹立たしく感じた。人の命を弄び、それをルールの一言で正当化しようなんて、絶対に許せない。怒りか、恐れか、呆れか、諦めか――言いたいことはたくさんあったけれど、それは言葉になることはなかった。

黙り込む私を前にユノとアシルも口をを閉ざす。重い沈黙の中、不意にユノが立ち上がった。部屋の隅に備え付けられた机へ向かった彼は、その机の引き出しから何かを取り出し、私達のもとへ戻る。

「……姫、これを」

目の前に差し出されたその“何か”に私は息を呑んだ。ゴトンと重い音を立てたそれは黒の拳銃。

「貴女の仰りたいこともわかります。身勝手で理不尽なゲームです。僕達もできることならこんな争いに何も知らない貴女を巻き込みたくはありません。しかし、もし貴女が参加を拒むようなら黒薔薇族の有力者が黙っていないでしょう。逃げることができないのなら進むしかありません。生きて帰りましょう。ですから……」

「……私にこれを使えというの？　無理よ、こんなもの……」

ユノの言葉を遮り、目の前の小型銃を睨むように見つめる。人を傷つけるための道具なんて触りたくもなかった。

「あんたが拒もうと、姫がローズゲームに参加することは絶対だ。ゲームから逃げたところで、怒り狂った有力者どもに処刑されるのがオチさ。あんたが生きる道はゲームに勝つこと、それだけだ。だから武器のひとつくらい持ってなきゃいけない。ローズゲームに丸腰で挑むなんて危険過ぎる」

「だからってこんなもの使えるわけないでしょう！」

感情が抑えきれず、思わず怒鳴ってしまった。一瞬、部屋の中がしんと静まり返る。いたたまれなくなり俯けば、コトンと何かが小さ

くテーブルを叩いた。

「これも持ってろ」

武器を拒む私にアシルはさらに武器を差し出す。銃の隣には小振りのナイフが置かれていた。

「だからこんなもの使えないって言ってるでしょう！　こんな……人を傷つける道具なんて……」

「……姫」

ユノが私を呼ぶ。肩に触れたその手はとても優しく感じた。

「何も貴女に戦えと言っている訳ではありません。僕達が全力で守ります。しかし、何が起こるかわかりません。これは人を傷つけるためではなく、自分を守る、護身用として持っていてください」

「でも……！」

それでも拒もうとする私をもう一度ユノが呼ぶ。優しく、されど、反論を許さないその声色に私は口を噤んだ。

「ローズゲームが本格的に始まるまでまだ少し時間があります。城内にいる限り他族が攻めてくることはありませんから今の内にゆっくり休んでおいて下さい。さぁ、お部屋までお送りします」

ユノに促され立ち上がる。テーブルの上の銃とナイフは置いていくことを許されなかった。

「あぁ、姫。これだけは覚えておいて。俺とユノに何かあってもあんたは振り返らず進むんだ」

アシルを振り返り、目でその言葉の意味を問う。彼は一拍置いて、静かに唇を開いた。

「例えば、騎士がふたり生き残っていても姫が殺されたら負けだし、逆に騎士がふたり殺されても姫さえ生き残っていれば勝ちなんだ。つまり、薔薇姫がふたり以上生きている限りローズゲームは終わらない。だからあんたは自分が生きることだけ考えろ。何があっても俺達に構うな」

アシルの言葉が重くのし掛かる。ひとりになっても最期まで戦わなくてはいけない恐怖。だけど、それ以上に――。

「貴方達はそこまでして何を得たいの……？　地位？　名誉？　死んだら何も意味ないじゃない……」

返って来たのは言葉ではなく、悲しげな笑顔だった――。

第二章　?.　黄薔薇の襲撃

黒薔薇の騎士と共に宵闇に染まる森へ。絶え間なく吹く風に無数の木の葉が揺れる。そのざわめきはまるで不吉の前兆のようで、私にはとても不気味なものに思えた。

身に纏うは漆黒のドレス。頭上を彩るは漆黒の髪飾り。姫の証だと聞かされたそれは、率直に言ってしまえばターゲットとしての目印。こんなもの脱ぎ捨ててしまいたかったけれど、そんなことは勿論許されはしなかった。

「……これからどうするの？」

「取り合えず使えそうな家屋を探そうと思います」

「……家屋？　ここって人が住んでいるの？」

「住んでいた、と言った方が正しいですね。昔、ここは特別な場所で様々な種族が共に暮らしていたそうです。今は誰も住んでいませんけどね」

家屋、と聞いて私は少し安堵した。いつ終わるかわからない、いつ襲われるかわからない、そんな状況下で何日もこの広大な森の中をさまよい歩かなければいけないのかと不安だった。ユノの言葉から野宿だけはどうにか避けられそうだ。

「……どうして誰もいなくなっちゃったの？」

「内戦が始まって皆逃げちまったんだってさ。ここって薔薇族の領土に囲まれてるからさぁ。ほら、地図で見ただろ？　薔薇族が内戦してたらそりゃこうなるよ。姫だって周りが内戦してるような所に住みたくないだろ？」

「……そうね」

「まぁ、そういう訳でこの森には廃屋が至る所にあるんですよ。そのどれかを拠点にして動こうと――伏せて！！」

パァンッ

ユノが声を張り上げたすぐ後に銃声が響いた。アシルに思いっ切り突き飛ばされたのはそれとほぼ同時。突然の出来事に私の身体は反応できず、無防備のまま地面へ叩きつけられた。

「「あーあ、外れちゃったかぁ」」

ボーイソプラノが重なる。顔を上げ、声の聞こえた方を見やるとそこにはふたりの少年が立っていた。夜闇に映える金髪とシャンパンゴールドの瞳。ふたりの少年は同じと言っても過言ではない程よく似ていた。そんな彼らの唯一の違いは髪型で、ひとりは短髪、もうひとりは肩まで伸びたその髪を後ろでひとまとめにに束ねている。ふたりが身に纏うくすんだ黄色のジャケットはユノとアシル、そして銀髪の青年――ジャンのものとよく似ていた。ユノとアシルは黒、ジャンは白。ならば黄を纏う彼らは黄薔薇族であろう。私よりもま

だ幼く見える少年の手には拳銃がしっかりと握られている。
そして、少年達の後ろには淡い黄色のドレスに身を包んだ少女がひとり。私とさして年が変わらなく見える彼女は、私と同じ、憐れな薔薇姫の運命を背負った黄薔薇の生まれ変わりだろう。
黒薔薇と黄薔薇。両者は相手の様子を窺うかのようにお互いを見据える。緊迫した空気の中、ふいに少年が口を開いた。
「見ろよ、セオ。バカアシルが代表騎士なんて驚きだな？」
短髪の少年は意地の悪い笑みを浮かべ、わざとこちらにも聞こえるように隣に立つ片割れに問い掛けた。
「本当だね、テオ。黒薔薇にはもっとマシな騎士はいないのかな？」
髪を結んだ少年がそれに応える。挑発するような声も小馬鹿にしたような表情も、そして、名前までもそっくり。短髪がテオ、長髪がセオ。なんてややこしいのだろう。
「……相変わらず生意気な双子だな。お前らが代表騎士だって方が驚きさ」
アシルは顔をしかめる。それはもう嫌そうに。苦虫を噛み潰したようとはまさにこのことだろう。
「生意気？　事実を述べたまでさ。なぁ、セオ？」
「そうだね、テオ。それに僕らはバカアシルと違って優秀な騎士だからね。僕らが選ばれたことは当然のことだよ」

「あ？」

「何？　聞こえなかったの？」

「しょうがないよ、セオ。バカアシルは僕らと違って耳も悪いみたいだから」

「……テメェらのその口、二度と利けねぇようにしてやろうか……？」

アシルの手は背中の大剣に伸び、静かにその柄を握った。肩は小刻みに震え、彼の怒りが見て取れる。そんなアシルの様子に、双子はニヤリと笑う。

「「できるならね？　お馬鹿さん♪」」

綺麗にハモったその一言でついにアシルがキレた。柄を強く握り大剣を引き抜く。アシルが一歩踏み出し、双子も銃を構えた。ついに始まる、そう思った刹那、ユノがアシルの肩を掴み、それを制した。

「なんで止める？」

大剣は構えたまま、アシルはチラリとユノを振り返る。いつもより低い声とその表情（かお）からアシルの機嫌の悪さが窺えた。

「そんな頭に血が上った状態では黄薔薇族薇の思う壺です。すぐ彼らのペースに飲み込まれてしまいますよ。それに利き腕がそんな状態で満足に戦えるんですか？」

辺りが暗いとはいえ、何故今まで気が付かなかったのだろう。驚い

た私は両手で口元を覆った。アシルの右腕には痛々しい傷。きっと先程の銃弾から私を庇った時だ。大したことない、とアシルは言うけれど、私には大怪我に見える。思わずその痛みを想像してしまい、私は自分の身体をギュッと抱きしめた。

「今回は僕に任せて下さい。まだゲームは始まったばかりですよ？　無理にやり合って何になるんですか？」

その言葉にアシルは押し黙る。ユノの言うことは正しい。それ故にアシルは何も言い返せず、わかったと一歩下がった。

「ではアシル、姫をお願いしますね」

「……ああ」

アシルは庇うように私の前に立ち、絶対に離れるなと言った。彼の背中は大きく、私の視界の大部分が覆われてしまう。私は彼の背中から少しだけ顔を出し、静かに辺りの様子を窺った。

「どちらが相手をしますか？　それともふたりで掛かってきます？」

ユノの声色が変わった。初めて会った時と同じ、殺気を含んだ低音。場の空気も一気に重みが増し、緊張が走る。

「なめられたものだね、セオ」

「まったくだね、テオ。僕らはふたり掛かりで向かって行くほど弱くもないし、バカでもないさ」

「僕らが姫から離れたら絶対にこの子を狙ってくるもんね。それく

らいわかってるさ。そう簡単に姫は殺らせないよ？　なぁ、セオ？」

「勿論さ」

「そうですか。では、どちらが先に地獄を見ます？」

ユノは笑みを湛えたまま双子に問う。しかし、目は笑っておらず、張り付けたようなその笑みは私に向けられる穏やかなそれとは全くの別物だった。

「なぁ、セオ？」

「わかってるよ、テオ。やりたいんだろ？」

「流石だね、セオ。姫をお願いね」

「任せといて、テオ」

「僕が相手をしてあげるよ、ユノ。地獄を見るのはどっちかな？」

短髪の少年――テオは銃を構える。張り詰めた空気。呼吸をすることすら躊躇われるように思えた。

「怖いか？」

「……え」

アシルに言われてハッとする。無意識の内に私は彼のジャケットを握り締めていた。小刻みに震えるその腕は何とも情けない。

「……怖くないって言ったら、嘘になるわ……」

「大丈夫だって。ユノは強ぇし、俺だってついてるから」

その言葉に私は小さく頷いた。だけど、この恐怖をそう簡単に拭い去ることなどできない。アシルが私の不安を和らげようとしてくれているのは十分に伝わってくるのだけれど、頭に浮かぶのは良くないことばかりだった。

銃を構え、彼らは相手の様子を窺う。どちらが先に動くのか、どちらがこの戦いを征するのか。心臓がドクンと脈打つ。

パァンッ

先に動いたのはテオだった。耳をつんざくような銃声が空気を震わせる。ユノはその一撃を軽々と避け、右手に握った銃を唸らせた。暗闇の中、両者は躊躇うことなく引き金を引く。飛び交う銃弾。絶え間ない銃声。鉛の雨は止むことがない。

「なぁ、アシル。僕らも遊ぼうか？」

セオがニヤリと笑う。彼は後ろに少女を庇ったままこちらに銃口を向けた。引き金に指をかけるのが見え、私は反射的に頭を引っ込めた。

銃声が響くのと同時にアシルが動いた。彼はその身の丈程もある大

剣で銃弾を見事に弾き飛ばす。金属がぶつかり合う嫌な音が空気を震わせた。

「バカアシルにしてはやるじゃん？　でも、いつまで耐えられるかな？」

「姫ッ！　頭引っ込めてろ！　絶対俺から離れるな！」

意地悪い笑みを浮かべ、セオは容赦なく引き金を引く。しかし、放たれた銃弾はアシルの見事なまでの剣捌きで全て弾かれた。怪我をしているというのにアシルの手元は少しも狂うことがない。

「……ちくしょう、これじゃ切りがねぇ」

防御は完璧。だけど、こちらには攻撃の術がない。剣と銃、遠距離戦ではやはり銃の方が有利だ。アシルひとりなら銃弾を防ぎながら距離を詰められるかもしれないけれど、今は私がいる。そのせいでアシルはこの場を離れられない。傷を負ったその腕で身の丈ほどもある大剣を振るい続けるのは限界があるばず。今は完璧な防御でも崩れるのはきっと時間の問題だろう。

「……ちぇッ、弾切れか」

セオがマガジンを素早く交換する。しかし、その銃身から再び銃弾が放たれることはなかった。セオの驚いたような声と共に彼の手から銃が弾き飛ぶ。銃弾が途切れた一瞬をつき、ユノがセオの銃を撃ち落としたのだ。

「セオ！　大丈夫か！？」

「余所見なんてしていていいんですか、テオ？」

テオの腕から鮮血が迸る。テオがユノから目を離した一瞬のことだった。悔しそうに顔を歪めるテオに対し、ユノは余裕の笑みを湛える。

「テオ！　誰かこっちへ向かって来る！　厄介だから一旦退こう！」

ハッとした表情を見せたセオは突然声を張り上げた。誰か来る、彼は確かにそう言ったけれど、そんな気配は微塵も感じられなかった。

「わかったよ、セオ。ユノッ！！　次会った時はボッコボコにしてやるからな！！」

テオはベッと舌を出し、捨て台詞を吐くと少女を連れてセオと共に闇の奥へと姿を消してしまった。――逃げた？　強気だった黄薔薇族。しかし、不利になった途端、彼等はこの場から離れた。そのため私にはどうしても彼らが逃げたようにしか見えなかった。

「姫、怪我はありませんでしたか？」

銃を収め、ユノは私達のもとへ歩み寄る。声色も笑顔もあの穏やかで優しいものに戻っていた。同一人物とは思えないこの変わりよう。――どちらが本当の彼なのだろう？　どちらも本当なのかもしれないし、どちらも本当ではないのかもしれない。

「大丈夫よ、アシルのお蔭で無傷だわ。ユノは？」

「大丈夫ですよ」

そう言って微笑んだユノはかすり傷ひとつ負っていなかった。彼が無事だったことに私は安堵する。それと同時に激しい銃撃戦の末無傷で帰ってきた彼に驚いた。

「なぁ、ユノ。取り敢えずさっさとこの場を離れよう」

「そうですね。まだ近くにはいないようですが、他族がこちらへ向かっている可能性が高いです。この暗闇の中で奇襲をかけられては厄介ですから」

辺りを軽く見渡し、ユノはアシルに同意する。双子の言葉はただ単に逃げるための口実ではなかったのだろうか。

「ねぇ、“誰か来る”って……あの子達の言葉、逃げるための口実じゃなくて本当のことなの……？」

「あの双子、耳だけはいいんですよ」

「耳……？」

ユノの答えを私は怪訝な顔で聞き返す。どれだけ耳が良かろうと人の聴覚など高がしれている。辺りに人の気配を探してみても耳につくのは木の葉が風に揺られる音ばかりで足音ひとつ聞こえない。

「詳しくはわかりませんが、集中すればかなり遠くの場所の音でも聞き分けられるそうです。きっと足音でも聞こえたんでしょう。負けず嫌いの彼らのことですから逃げるための口実ではないと思いますよ」

三キロ程度なら余裕なんじゃないですか、とユノは言った。私の予

想を遥かに超えたその答えに私はただ一言そう、と返すことしかできなかった。

耳に残る銃声。目に焼き付いた鮮血。不安、恐怖。私の中で膨らむ負の感情。だけど、これはまだ序章に過ぎない。残酷劇は始まったばかり――。

?. 黒の包帯

「……ねぇ、本当に大丈夫？」

「だーいじょうぶだって。姫は心配性だなぁ」

「……だってぇ……」

もう何度目かになるこの会話。私は馬鹿の一つ覚えみたいに『大丈夫？』と繰り返す。アシルの右腕に刻まれた痛々しい傷。怪我をしたその腕で無理をして大剣を振るったせいか、真っ赤な血は今もまだ流れ続けている。決して軽いとは言えない傷なのにアシルは大丈夫だと言い張り、その傷を放置したままだった。私を庇ったがためにできた傷。アシルは私に非はないと言うけれど、どうしても責任を感じずにはいられない。そんな想いが溢れ出し、言葉となって唇から零れ落ちる。『大丈夫？』――この言葉を何度繰り返したって意味をなさないことくらいわかっているけれど……。せめて止血だけでもできればいいのだが、生憎包帯は勿論、今はハンカチすら持っていなかった。――嗚呼、どうして制服のポケットにハンカチを入れっぱなしにして来ちゃったのかしらっ！

ないとわかっていながらも私はポシェットの中を探った。その手に触れるのはユノとアシルに半ば強引に渡された拳銃とナイフだけ。何となくそのナイフを取り出し、手の中で転がす。――こんなもの何の役にも立たないじゃない。所詮人を傷つけるためだけの道具。それは人を癒すことなんてできない。手の中のナイフに八つ当たりしたい気持ちを抑え、それをポシェットに戻そうとしたその時、私にあるひとつの考えが浮かんだ。こんなものでも役に立つかもしれ

ない。

「姫ッ！？　ちょっと待て！　何してんだッ！？」

私は突如立ち止まり、ナイフでドレスの裾を切り裂いた。布の裂ける音が静かな森に大きく響き渡る。ユノもアシルも私の突然の奇行に驚いたようで、慌てた様子を見せた。

「ほらアシル、しゃがんで」

動揺するアシルを有無を言わせぬ強い口調でしゃがませ、彼の腕につい先程までドレスの一部だった黒い布を丁寧に巻きつける。不格好な包帯だけど、何もしないよりはマシだろう。

「俺は大丈夫なのに……。姫のドレスがボロボロになっちまったじゃねぇか」

「ちょっと丈が短くなっただけよ。このドレスは私のものなんでしょう？　だったらどう使おうと私の勝手だわ。……はい、終わり」

私が布を巻き終えるとアシルはありがとう、と呟いた。照れたようにはにかむ彼はちょっとばかり可愛く見えた。

†

「これなら大丈夫そうですね」

「はぁ……やっと、ね……」

あれから暫く歩き、私達は漸く石造りの簡素な家を見つけた。小さめなその家にはベッド、テーブル、椅子など必要最低限の家具が備え付けられている。埃っぽいけれど、長年放置されていた割に傷みはそれほど酷くはなかった。実はここに来る前に数軒、木造の家屋を見つけていたのだけれど、どれも傷みが激しくてとても使える状態ではなかった。そのせいで相当な距離を歩く羽目になり、足がパンパンになってしまった。もうこれ以上歩きたくない。私はこんなにも疲れているというのに、涼しげな顔のユノとアシルに僅かに苛つきを覚える。

「大丈夫ですか、姫？」

「ちょっと大丈夫じゃないかも……」

私は近場にあった椅子の埃を払い、それに腰掛けた。大分埃を被っていたから多少抵抗はあったけれど、そんなことよりも早く座りたいという気持ちの方が大きかった。

「あまり無理しないで下さいね。あの時も遠慮しなくて良かったんですよ？」

「いや……あれは……」

ユノの言う“あの時”とは何軒目かの廃屋を見つけた直後のこと。
既に疲労がピークに達しかけていた私にユノがある申し出をしてくれたのだけど……。

＋―…＋†＋…―＋

「柱が腐りかけてますね……」

「また、ダメなの……？」

「そうですね、これではちょっと……」

「うそぉ……」

歩き始めてからどれくらいの時間が経ったのか、時計を持っていない私には正確な時間なんてわからない。だけど、その時間は決して短いものではないということだけは確かだった。休むことなく歩き続けてきたのだから歩いた距離だって勿論短くはない。

「もう……いつになったら見つかるのよ……」

いつまでも進歩のないこの状況に私はガックリとうなだれた。ただでさえ疎らにしかないというのにそのどれもが使えないとなるとだんだん嫌気が差してくる。

「すいません。こんなに歩かせてしまって……」

疲れたかと問われ、私は素直に頷いた。まだ頑張れるから大丈夫、とでも言えればよかったのかもしれないけれど、そんな余裕すらない程に私は疲労していた。

「それなら――」

「……え？」

ユノは私のすぐ側まで来ると私の肩と膕（ひかがみ）に腕を回した。次の瞬間、私の足は地を離れ、ふわりと身体が浮き上がる。顔を上げれば、すぐ近くにユノの顔が。

――そう、俗に言うお姫様抱っこだ。

「い、いいよっ！　こんなことしなくて！　降ろして降ろしてっ！」

「でも、お疲れでしょう？」

「そ、そうだけど……でも、大丈夫だからっ！」

私は顔を真っ赤にしながら必死に訴えた。その姿は滑稽に見えたかもしれない。でも、この状況にどう対応していいのかわからなくて、私にはこれが精一杯だった。

私が通うのは名の知れたお嬢様学校。男子禁制のため先生も全員女性。そんな女学園に幼稚舎から通っている私は親と親戚以外の男の人と殆ど関わったことがなかった。

――つまり、こういうことに免疫がない。

この状況は初めてじゃない。城に連れて行かれた時もそうだった。だけど、あの時の私と今の私とでは置かれている状況が違う。ここがどこなのかわからない。彼らを信用していいのかわからない。先の見えない未来に怯え、抱えきれない不安に押し潰されそうだったあの時の私には周りなんて見えていなかった。今の状況も決して良いものとは言えない。寧ろ悪い方向へ進んでいる。でも、今は信用しても大丈夫だと思える人が傍にいる。それだけでほんの少し気持ちにゆとりが生まれたのかもしれない。気恥ずかしさを感じるのはきっとこのせいだろう。あの時にそう感じなかったのはそこまでまで考えている余裕がなかったというだけの話だ。歩かなくてもいいなんてかなり有り難い話。その上、その有り難い申し出をしてくれたのが羨ましいくらい綺麗な顔立ちの青年となれば、本当なら文句のつけようがない。だけど……熱くなる頬、大きくなる心音。何だか無性に恥ずかしくて、そんな自分に堪えきれなかった――。

＋―…＋†＋…―＋

だから私は疲れた身体に鞭打って無理矢理ここまで歩いてきた。私のことを気遣ってくれたユノの気持ちは嬉しいけれど、あんなことされたら心臓が保たない。一度座ってしまうともう立つ気にはなれず、私は椅子に腰掛けたままぼんやりとふたりの会話に耳を傾けた。

「なぁユノ、これからどうすんだ？」

「しばらくは様子を見ましょう」

「こっちから仕掛けねぇの？」

アシルはベッドに積もった埃を払いながら会話を続ける。片手で口元を覆っているため声が籠もり、聞き取りづらい。バシバシと叩くようにして払うものだから彼の周りには大量の埃が舞い上がっていた。それ程広くない部屋だからか、窓を全開にしているにも拘わらず、それは忽ちに部屋中に広がっていく。余りの埃っぽさに私は思わず顔をしかめ、両手で口元を覆った。

「この近くで他族を確認した場合は仕掛けましょう。ですが、探してまで仕掛ける必要はないかと。探すとなるとどうしてもここを離れなくてはいけません。姫から離れるのは危険ですし、かといって連れて行っても危険な目に遭わせてしまう可能性が高い――って、アシル！もう少し加減して叩（はた）いて下さい！」

次々に舞い上がる埃にユノも口元に手を当て、綺麗な顔を僅かばかり歪める。口元を覆っているとはいえ、平気な顔をして埃を払い続けるアシルが私には不思議でたまらなかった。

「……ねぇ、逆に仕掛けられた時って大丈夫なの？　出口を塞がれて、火でも付けられたら……」

彼らの話を聞いていてふと思った。家の中って一見安全そうだけど、本当にそうだろうか。火を放たれればきっとひとたまりもない。窓の近くにいたら外から狙撃される可能性だってある。

「御心配なく。アシルと交代で見張りをしますし、それに完全に気配を消せる人なんてそうはいませんから。仕掛けられる前に気付くことができればいくらでも手の打ちようはあります」

「ユノは僅かな気配でも察知できるんだ。俺もユノ程じゃないけど、人の気配を察知するのは得意な方だから安心していいよ。そんなことよりさ、少し寝たら？　疲れてるだろ？」

アシルはそう言って、先程まで乱暴に叩いていたベッドを指差す。近づいてみるとそれは意外と綺麗だった。

「……貴方達は？　アシルとユノだって疲れてるでしょ……？」

「僕らは交代で眠りますから大丈夫ですよ。僕らのことは気にせず、ゆっくり休んで下さい」

「そうそう、俺達は大丈夫だから」

「そう……？　ありがとう。じゃあ……少し眠らせてもらおうかな」

彼らの言葉に甘え、私は柔らかいベッドに身を委ねる。疲れのせいか、横になると私はすぐに夢の世界へ墜ちていった。

現実はまるで終わりの見えない悪夢。それならば……お願い、せめて夢の中では優しく穏やかな世界を――。

?. 偽りの光、真実の闇

――ねぇ

私を呼んで？

――違う

そうじゃない

貴方が呼んでいるのは

“私”じゃないわ――…

＋―…＋†＋…―＋

窓の外を見ると、いつの間にか仄かな朱色を纏った闇は、全てを呑み込んでしまいそうなほど暗く深い漆黒へと姿を変えていた。私はこの国で数回目の夜を迎える。あの双子と接触して以来、私達は他族を見掛けてはいない。――このまま何も起こらなければいいのに。無理だとわかっていながらも私は幾度となく平穏を願った。この数日間は偶々何も起こらなかったけれど、いずれ他族と衝突することになる。避けたくても避けることなんてできないってわかってる。わかってるけれど……。それでも尚、平穏を願う私は愚かなのだろうか。

私は机の上に肘を付き、小さく溜息をついた。薄汚れた窓ガラスは翳った私の表情（かお）を映し出す。私は窓ガラス、正確に言えばそれが映し出すものを見て、もう一度溜息をついた。黒いドレスを纏った少女。ガラスに映るその姿は紛れもない自分のもので―…。嗚呼、制服を着ていた頃に戻れたらいいのに。

「……皆、どうしているのかな……？」

誰に問う訳でもないその言葉は空（くう）に吸い込まれ消えていく。答えなんて期待していない。抑（そもそも）この部屋には私ひとりしかいないのだから。アシルは外に行ったきりで、ユノは戦闘時以外まで武器なんか見たくないないだろうと私に気を使い、隣の部屋で銃の手入れをしている。私の言葉を聞いていた人なんてひとりもいないのだから答えなんて返って来るはずがない。

ひとりだからこそ零れたこの言葉。ひとりの時に思うのは元の世界

のことばかり。――父さんはどうしている？　母さんは？　ロゼは？　きっと皆心配している。華の国《この世界》と人間界《私の世界》の時間の進み方には違いがあるかもしれないけれど、長い間留守にしていることに変わりはないのだから。

目が覚めた時、そこが見慣れた自分の部屋だったらどんなに嬉しいだろう。寝起きの悪い私を家政婦のモニカさんが起こしに来てくれるの。起きないと遅刻しますよお嬢様、って。ダイニングの扉を開ければ母さんが優しい笑顔で迎えてくれるの。おはようアンジェリカ、って。

これがただの悪い夢なら覚めてしまえばそこで全てが終わるけれど、これは現実という名の悪夢。覚めることなど永遠にない本当の悪夢。

またひとつ溜息が零れ落ちる。ひとりでいると駄目だ。浮かぶのは暗いことばかり。しかし、だからといってユノやアシルと一緒にいれば大丈夫という訳でもなかった。彼らとは大分親しくなったし、ふたり共私にとても優しくしてくれる。私もふたりのこと嫌いじゃない。だけど、彼らの傍にいるのは“私”じゃないから―…。

机に突っ伏し、私の中で渦巻く闇を言葉として吐き捨てる。小さく呟いたそれもまた誰に届くこともなく、空に消える――はずだった。

「ただいま、アンジェリカ」

誰もいなかった。誰もいないと思っていた。それなのにすぐ近くで名前を呼ばれた。驚いた私は悲鳴に近い声を上げ、勢い良く後ろを振り返った。その反動で椅子が傾き、派手な音を立てて椅子ごと床に倒れ込む。隣の部屋からドンッと何か床に落ちたような音が聞こえたのはその直後のこと。そして、乱暴に扉が開かれ、ユノが部屋

に飛び込んできたのはその数秒後のことだった。

「姫ッ！　どうしましたか！？」

血相を変え、声を荒げる。今のユノからはいつもの冷静さなど微塵も感じられない。私の声と派手な物音に驚いたのだろう。これほどにも慌てた彼を見るのは初めてだった。でも、それは束の間のこと。部屋の様子を見た次の瞬間にはユノの焦りに満ちた表情はきょとんとしたものに変わり、彼はドアの近くで立ち止まってしまった。

部屋にいるのは私とアシルのふたりだけ。他族の姿もなければ、荒らされた形跡もない。勿論私もアシルも無傷。ユノがそんな顔をするのも無理ないだろう。

「何でもねぇよ、ユノ。俺が後ろからいきなり話し掛けたから姫が驚いちゃってさ。それだけだよ」

「……ぇ」

――さっき名前を呼ばれたのは気のせい……？　後ろから聞こえた声。『アンジェリカ』と呼んだそれは確かにアシルの声だった。だけど、今、彼は私のことを『姫』と呼んだ。

「そうですか。姫に何かあったらどうしようかと思いましたよ」

「見ての通り何もねぇよ。姫もごめんな、驚かせちゃって」

「……えっ……ううん……」

戸惑いながらも私は差し出されたアシルの手を取り、立ち上がる。

何でもないと知り、ユノは放置してきた銃の手入れの続きをすると部屋から出て行った。それを聞いたアシルが俺も武器の手入れをする、とユノを追う。私は呆然と彼らの背中を見送った。そして、私はまた部屋にひとり。静寂の中、『アンジェリカ』と呼んだテノールが頭の中で反響する。気のせいじゃない。やっぱりあれは気のせいじゃない。

「どうして……」

今まで私のことをそんな風に呼んだことなんてないのに……。独り言を聞かれてしまったのだろうか。いや、違う。ただのアシルの気まぐれ、きっとそう。ふらふらとベッドに近付き、私はそのまま倒れ込んだ。枕を抱き寄せ、顔を埋める。

「でも……やっぱり私は“黒薔薇姫”なのかな……」

代用の姫君、偽りの私。
私の心に巣くう闇を彼らは知らない――。

?. 姫と私

あの日――ユノとアシルに出逢った日から私はずっと独りだった。
いつも彼らが傍にいたけど、私は独りだったの―…。

彼らが見ているのは

彼らが呼んでいるのは

彼らが護っているのは

彼らの傍にいるのは

“私”じゃないの

ユノとアシルは“私”を通して“姫”を見ている。ふたりだけじゃない。この国の人全てが“私”を通して“黒薔薇姫”を見ている。私はお姫様の代わりでしかないの。生まれ変わりだか何だか知らないけれど、私は本当の姫じゃない。それ以前にこの国の住人ですらないのだから。私は読心術なんて使えないから彼らの本当の気持ちなんてわからないけれど、私にはこれがただの思い違いだとは考えられなかった。

――だって、そうでしょう？　初めて逢った人間を自らの身を危険にさらしてまで助けるはずがない。だけど、彼らは私を助けた。私の名前を知っていたくらいだから、もしかしたら、ふたりは以前から私のことを知っていたのかもしれないけれど、逢ったのはあの時が初めて。それなのに彼らは私を助けた。

理由は簡単。私が黒薔薇姫だから。

私が黒薔薇姫の生まれ変わりじゃなかったら彼らは私を助けただろうか？　いや、それ以前にいきなり命を狙われるようなこともなかっただろう。

黒薔薇が助けたのは誰？

白薔薇が殺そうとしたのは誰？

それは“姫”であって“私”じゃない。

ユノとアシルに『姫』と呼ばれるたび、胸の奥がズキリと痛む。だけど、名前で呼ばれたところで何も変わらないのだと気付いてしまった。あの日、アシルが私のことを『アンジェリカ』と呼んだのはやはり気のせいではなかった。あれから彼は私のことを徐々に名前で呼ぶようになり、気付けばユノまでも私を『アンジェリカ』と呼ぶようになっていた。『姫』ではなく名前で呼んでもらえれば少しはこの気持ちを誤魔化せるのではないかと思った時期もあったけれ

ど、表面だけ繕ったって結局は何も変わらない。ただ虚しいだけだ。

――ねぇ、貴方達のその笑顔は誰に向けられているの？

“私”の価値って何？

“私”の存在理由って何？

私はその答えを見つける術を知らない。

だけど、たとえユノとアシルが“私”を見ていないとしても私は彼らを信用している。これは嘘じゃない。だって、私が黒薔薇姫である限り、彼らは私を絶対に裏切らないから。

――歪んだ考え方だって？　そんなこと自分が一番よくわかっている。本当は純粋に彼らを信じたい。だけど、私は強くないからこんな歪んだ考え方しかできないの。信じて信じて、それでも裏切られたら？　そう、これは傷付かないための自己防衛。私は弱い人間だから。

どうして私が姫の生まれ変わりなのだろう。これは偶然？　それとも必然？　私である必要があるの？　だって、もし他の女の子が黒薔薇姫なら貴方達はその子を護るのでしょう？　もし、私が黒薔薇族以外のお姫様だったら貴方達は私を殺すのでしょう？　それなら誰でも同じじゃないか。私が黒薔薇族のお姫様である必要なんてどこにもない。偶然の運命になんて振り回されたくないの。

でも、もしそうでないなら……何故私が姫の生まれ変わりなの？

全てを知りたい。

何も知らないままでいたい。

矛盾していることはわかっている。でも、もう自分で自分がわからないの。

ユノとアシルは“私”のことをどう思っている？　彼らにとって“私”の存在って何？　その答えを知りたい。でも、全てを知ってしまうのが怖い。そんな風に思うのは、きっと心のどこかで僅かに期待をしているからなのだろう。ふたりが“姫”じゃなくてちゃんと“私”を見てくれているのではないかと。全てを否定する私と淡い期待を抱く私。交錯する想い。本当の想いはどこにある？

――私は、何を信じたらいいのかな……？

この時の私は何も知らなかった。彼らの本当の気持ちも、彼らの私に対する想いも、そして私達に忍び寄る蒼い影があることも――。

第三章　?．蒼の影、赤と黒の舞台

揺れる木の葉。頬を撫ぜる夜風。下を見れば、暗闇の中に仄かな明かりの漏れる小さな家が浮かび上がる。固くゴツゴツした感触。遥か下の方に見える地面。私は今、高い高い木の上にいる。隣にはユノ。別の木の上にはアシル。木の葉に身を隠し、私達は息を潜める。

――何故私達がこんな所にいるのか。それは数時間前まで遡る。全てはユノのあの一言から始まった――。

†――…†…――†

『青薔薇族に気付かれたかもしれません』

今朝、一番に聞かされたのがこの言葉だった。私が寝ている間にユノが何者かの気配を感じ取ったらしい。彼によるとそれは青薔薇族のもので間違いないだろうとのことだった。

青薔薇族の姿を見た訳でもないのにユノがそう断言できる理由、そ

れは彼らがその場からすぐに退いていったからだという。だから私のことも起こさなかったのだと。私には何故それだけのことでそう言い切れるのかいまいち理解できなかったけれど、ユノとアシルが言うにはこれが彼らのお決まりの戦法らしい。

青薔薇族の代表騎士であるエルヴァとラウルは相手に気付かれず敵（ターゲット）を見つけ出し、ターゲットがそこからすぐには移動しないと踏むとその場から一旦離れ、日が沈んでから暗闇に紛れて奇襲をかけるのだという。今まで多くの人々が彼らの手によって地獄を見てきたらしい。しかし、これは黒薔薇族の代表騎士達にとっては殆ど意味のないこと。何故なら彼らは人の気配を察知することに長けているから。先に気付かれてしまってはこの戦法は全く意味をなさない。

休戦中にも拘わらず薔薇族の間では有能な騎士を狙った奇襲が後を絶たなかったという。理由は只ひとつ。そう、全てはローズゲームのため。ローズゲームが始まる前に代表騎士になり得る者を始末してしまおうという訳だ。そのため、エルヴァとラウルもこの方法でユノとアシルを仕留めようとしたのだけれど、その時は見事に失敗したらしい。

┼──…┼…──┼

だから今回も返り討ちにしてやろうって訳だ。青薔薇を刈り取るために私達はこんな所で彼らを待ち構えている。一度失敗しているのだから今回も同じ方法を取るとは限らないのではないか、初めはそう思ったけれど、彼らの失敗は一度や二度じゃない。彼らはこの方法で幾度となく黒薔薇を討ち取ろうとし、そして幾度となく返り討ちにされてきたらしい。それでも彼らがこの戦法で多くの人々を仕留めてきたのもまた事実。頭がいいのか悪いのか、よくわからないふたり組だと思う。もしかしたらただ意固地なだけなのかもしれない。

「アンジェリカ、来たみたいですよ」

不意にユノが私の耳元で囁いた。見れば、深い青のドレスを纏った少女と群青色の髪のふたりの青年の姿が。いや、ひとりは『青年』というより『少年』といった方が正しいかもしれない。

ひとりは背が高く、体つきもがっしりとして、どことなく威圧感があった。この位置からではよくわからないが、ユノやアシルよりずっと大きいと思われる。青年の手に握られた拳銃は、恐らくユノや私が持っているものと殆ど大きさは変わらないのだろうけれど、彼が持つことでそれはとてもとても小さく見えた。それに対し、もうひとりの騎士は随分と小柄だった。もしかしたら隣に立つ少女よりも小さいかもしれない。男とはいえ、その小さな身体のどこにそんな力があるのか、彼は自分より遥かに大きな斧を軽々と担いでいた。この場合、普通武器は逆ではないだろうか。少女を挟むようにして立つふたりの騎士はどう見てもアンバランスだった。

「あれが青薔薇……？」

「はい。背の高い方がラウル、低い方がエルヴァです。因みにエルヴァはあれでもアシルと同い年です」

「えっ……！」

以前聞いた話ではアシルは確か１７歳。私が『少年』と称した彼がアシルと同い年とは驚いた。背が低い上に童顔なものだからてっきりか１３か１４程度だと思っていた。ユノの言葉があまりにも意外で、私は青薔薇族に向けていた視線を思わず隣にいるユノに向ける。

声を潜めながらとはいえ、彼といつものように会話をすることで少し気持ちが緩んでしまったのかもしれない。一瞬でも油断してしまった私が悪いと思う。だけど、ほんの少し青薔薇族から視線を外した間にまさかあんなことが起こるなんて誰が想像できよう。

何の前触れもなかった。いきなりユノに抱きすくめられ、私は訳もわからず彼の腕の中へ。

――刹那。

派手な爆発音。

激しい爆風。

それは一瞬の出来事だった。恐る恐る下を見ればそこには炎に飲み

込まれた小さな家が。驚いたなんてもんじゃない。本当に心臓が止まるかと思った。

「……ばく、だん……」

「はい、これが彼らの戦法です。全く……今回も派手にやってくれましたね。今夜は野宿になってしまいそうですが、我慢して下さい」

呆然とする私にユノは後で迎えに来ます、と笑いかけると銃を握り、木の上から飛び出していった。

パァン

拳銃が唸り、銃弾が放たれる。狙うは青薔薇姫。ラウルが身を挺して少女を庇うも僅かに避けきれず、少女の頬を銃弾が掠める。

パァン

放たれた二発目。ラウルの腕から迸る赤い赤い鮮血。続けて別の木の上で待ち構えていたアシルが大剣を振り上げ、切りかかる。落下のスピードを利用し、いつもより威力の増した刃で青薔薇姫を狙う。

キンッ

間一髪。ギリギリのところでエルヴァが斧で大剣を受け止めた。しかし、勢いのついた剣は重く、彼は少女共々地面へ倒れ込む。

「なっ！　お前ら、なんで……！」

「残念だったなぁ。家の中には誰もいねぇよ」

「くそっ……！」

耳をつんざく銃声。

甲高い金属音。

恐怖に染まる少女の悲鳴。

迸る鮮血。

燃え盛る炎。

赤と黒が支配する舞台（ステージ）で彼らは残酷な不協和音（ハーモニー）を奏でる。恐怖劇の唯一の観客は私。特等席で物語の行く末を見守る。

息を殺して。

じっと動かないで。

音を立てては駄目。見つかったら私も役者の仲間入り。恐怖劇の主役なんて絶対に嫌。

黒薔薇優勢。青薔薇は姫を護ることで精一杯。鮮やかな赤が舞い、青薔薇は少しずつ赤に侵蝕されてゆく。黒薔薇の勝利は時間の問題だと思った。それなのに――。

「きゃっ……！」

突然吹いた強い風。その風に煽られ、バランスを崩した私。足場をなくしたその身体は重力に逆らえず、下へ向かう。――落ちるっ……！　枝を掴もうと私は咄嗟に腕を伸ばした。幸いにもその手は枝に届き、身体が地面に叩きつけられることはなかった。だけど、安心はできない。だって……。

役者がひとり増えた。さぁ、主役交代の時間が訪れる。

「見ぃつけた」

青薔薇は私を見据え、不敵な笑みを浮かべた――。

?. ラファールの悪戯

ゲームは最後まで何が起こるかわからない。

だからゲームは面白いのです。

先が見えてしまうゲームなんてつまらないでしょう？

退屈がお嫌いな勝利の女神。

気紛れな彼女はどちらに微笑むでしょうか？

┼─…┼…─┼

形勢逆転。状況は１８０度変わってしまった。

「そんな所にいたんだね、オ　ヒ　メ　サ　マ」

エルヴァは口角を吊り上げ、悪魔の笑みを浮かべた。一瞬にして凍り付く背筋。恐怖という感情が全身を駆け巡る。この手を離せば固い地面へ一直線。だけど、離さなければ――。

表情を一切変えず、ラウルは無言で私に銃口を向ける。脳裏に浮かぶのは赤を纏う自分の姿。このままでいたらどうなるか、そんなことはわかっている。だけど、枝を掴んでいるだけで精一杯の私に一体何ができるというのだ。

引き金に指がかけられる。脳裏に『死』という一文字がよぎったその時だった。ユノがとっさにラウルの右腕を蹴り上げた。鈍い音、続けて銃声が響く。放たれた銃弾は私の左腕を掠め、真っ赤な血を滲ませた。襲いくる痛み。思わず離してしまった左手。更にそこへ再び突風が襲う。私を嘲笑うかのように不規則に吹き荒れる風。もう一度枝を掴もうと腕を伸ばしたけれど、疲れきった華奢な腕では耐えきれるはずもなく―…。

「あっ――！」

ついに右手までも離してしまった。必死に伸ばした手は虚しくも宙をかき、私は地面へ向かって一直線に墜ちてゆく。耳元で響く風の音。ゴォッと唸る低い音に聞き慣れたふたつの声が重なる。私の名を叫ぶ黒衣の騎士。ぶれる視界の端に映ったのは大剣を投げ捨て、必死に駆け寄るアシルの姿。

眼前に迫る地面。アシルは私を受け止めようと飛び込むようにして

腕を伸ばす。迫り来る恐怖。私は固く目を瞑り、唇を噛み締めた。

鈍い音が響く。背中に衝撃を感じたけれど、痛みはそれ程酷くはなかった。目を閉じていてもわかる。私の頭をしっかりと抱える大きな手。アシルが私を衝撃から護ってくれた。

「……アンジェリカ、大丈夫か！？」

私はそっと瞼を開けた。大丈夫、そう言おうと口を開いたのだけど、私の口から飛び出した言葉は全く別のものだった――。

「アシルッ！　後ろォ！！」

目の前にはアシルの顔。そして、その後ろには大きな斧を振り翳すエルヴァの姿が。エルヴァは私達を見下ろし、不敵な笑みを浮かべる。彼は私達に狙いを定め、巨大な斧を振り下ろした。

パァンッ

響く銃声。ユノが放った銃弾がエルヴァの腕を捉える。彼の手に握られた斧はぐらりと揺れ、私達のすぐ横を通り、地面に深く突き刺さった。

パァンッ

再び響く銃声。ユノがラウルから視線を外した時にできた一瞬の隙。ラウルはそれを見逃さなかった。あの距離では流石のユノも避けきれず、彼の肩口から真っ赤な鮮血が迸る。

「アシルッ！」

ユノは声を張り上げ、もうひとりの黒薔薇の名を呼んだ。アシルが投げ捨てた大剣を拾い上げ、こちらに向かって走り寄る。アシルは小さく頷くと私を抱き上げ、ユノの後を追った。

「待てッ！　黒薔薇ァ！！」

エルヴァの声と数回の銃声が聞こえたけれど、青薔薇も決して軽いとは言えない傷を負っていたせいか、彼らが私達を追ってくることはなかった――。

†

青薔薇族の姿と紅く燃え盛る焔はもう完全に見えなくなっていた。ユノとアシルは既に走ることを止めていたけれど、私は未だアシルに抱えられたまま。彼らが地面を蹴る音を聞きながら私は頬を撫ぜる冷たい風を感じていた。

――あの時、私が……。私を苛む想い。責任感が私の胸を締め付ける。急に涙が込み上げ、私は俯き、唇を噛み締めた。ふたりに悟られたくなくて、溢れ出しそうになる涙を必死に堪える。だけど、彼らも鈍感ではないから――……。

「アンジェリカ……？」

先に私の異変に気付いたのはアシルだった。少し先を歩いていたユノも振り返り、足を止める。

「……大丈夫か？」

アシルは私をそっと地面へ降ろし、その肩に優しく触れた。私を見るふたりの表情（かお）はとても心配そうで。

「……ごめんなさい」

私は俯いたまま呟くようにそう言った。その声は今にも消え入りそうで、吹き荒れる風の音に掻き消されてしまいそうな程か細い。

「私のせいだわ……」

震える声で言葉を紡ぐ。口を開くたび、じわりと涙が滲んだ。

「アンジェリカのせいじゃありません。今回は運が悪かっただけですよ」

貴女は悪くない、とユノは微笑んだけれど、その笑顔はどことなく辛そうで。当然だ。あんな傷を負って辛くないはずないのだから。

「違う、私のせいだわ……。ユノが怪我したのだって私が……！」

ついに瞳から一滴の涙が零れ落ちた。それは私の頬を伝い、一筋の跡を残す。

「こんなのただのかすり傷です」

ユノの嘘つき。どう見たってかすり傷じゃないのに。それなのに彼はいつも通りに笑おうとする。

「……嘘っ！どう見たってかすり傷なんかじゃ……！」

再び口を開くと唇にユノの長い指が触れた。私が口を噤むとユノはもう一度、かすり傷だと言って微笑む。そんな彼に私はそれ以上何も言うことができなかった――。

これが義務的な愛だというならば、私はそんなものいらない。優しくしないで。どうしていいかわからなくなるから――。

?. 黒衣のシュヴァリエ

『護らなくちゃ』じゃなくて『護りたい』。『義務的に』じゃなくて『純粋に』。自分のそんな気持ちに気付いたのはあの日から。じゃあ、そう思うようになったのはいつからだった？

今までにも護衛の仕事は何度かやったことがある。だけど、こんな風に思えたことなんて一度もなかった。俺達のことなんか少しも気遣わない護衛対象ども。俺達が傷を負おうと奴等はお構いなし。有力者にとって俺達、騎士団員は使い捨ての駒に過ぎない。奴等にとっても俺達にとってもそれが当たり前だった。だけど、あの子は違う。一緒に過ごした時間はまだ短いけれど、少なくとも俺はそう感じたんだ。

――なぁ、俺達じゃあんたの傍にいてあげられないのかな……？

＋――…†…――＋

薄暗い森の中、地面に座り込み、固い幹に背中を預ける。隣には黒

衣の少女。朝からずっと強張っていた表情も今は安らかな寝顔へと変わっている。俺の肩に頭を預け、小さく寝息をたてるその姿に柄にもなく可愛いだなんて思ってしまった。吹き荒れていた風も穏やかになり、俺達を優しく撫ぜる。辺りは静まり、先程のことがまるで嘘のようだった。

「……はぁ」

無意識の内に零れる溜め息。こうも静かだとどうしてもあの日のことが頭をよぎる。俺らしくもない。自分でもそう思う。落ち着かないこの気持ち。それを無理矢理振り払うかのように俺はがしがしと乱暴に頭を掻いた。

「……アシル、何かあったんですか？」

不意に聞こえたユノの声に思わず肩が跳ねる。見ればユノは眉を顰め、怪訝そうに俺のことを見ていた。

「何だよユノ、まだ起きてたのか。俺が見張ってるからお前は休んでろって言ったろ？」

「そんな何度も溜め息をつかれちゃ寝るに寝れませんよ……」

うっ、と言葉に詰まる。誤魔化そうと思って無理矢理話を逸らしてみたけれど……駄目だ、これ以上言葉が出て来ない。

「……悪ィ」

たっぷり間をあけて漸く出たのがこれだった。バカだな俺は。こんな態度をとったらユノに心配かけるだけだっていうのに。

「……何があったか知りませんが、相談くらいは乗りますよ？　……まぁ、無理に話せとは言いませんが」

「……あのな、俺……」

そこまで言って俺は口を閉ざした。実はユノに話すべきかどうかずっと迷っていた。強引に聞き出してくれれば楽なのにユノはいつもそうやって強く聞いてはくれない。口を開けては閉じ、また開けては閉じる。馬鹿の一つ覚えみたいにそれを繰り返す俺は端から見たら滑稽かもしれない。嫌な沈黙の中、ユノの怪訝な視線が痛い程に突き刺さる。話せば解決するかと聞かれれば答えはきっとイエスではないだろう。だけど……。

「……俺、聞いちゃったんだよ」

長い沈黙を静かに破り、躊躇いながらも俺はそう切り出した。

「何を、ですか……？」

眉を顰め、ユノは俺に問う。迷いは未だに消えてはいないが、ここまで言ったのだからもう話すしかないだろうと自分に言い聞かせ、俺はあの日のことを話し始めた――。

＋――…＋†＋…――＋

あの日、外から戻って来た俺が部屋の扉を開けると、そこには華奢な腕に顔を埋めるアンジェリカの姿があった。一向に顔を上げようとしない彼女の様子にいつもと違う雰囲気を感じながらも話し掛けようと近づいたその時だ。僅かにアンジェリカの声が聞こえた。悲痛な声色に思わず彼女の肩に伸ばしかけた手が止まる。小さく震えるその声が紡ぎ出す言葉に俺は動揺した。アンジェリカが呟いたあの言葉。俺は今でも鮮明に覚えている。

――ふたりの傍にいるのは私じゃない。

――私はアンジェリカ、黒薔薇姫じゃない。

確かに彼女はこう言った。だから俺は彼女を『姫』ではなく、『アンジェリカ』と呼ぶことに決めた。だけど、結局のところそれは無意味だったのかもしれない。時折、アンジェリカは一瞬だけ悲しげな表情を見せることがあった。あれはきっと無意識なもの。恐らく彼女自身は気付いていない。あんな顔をさせたくなくて、彼女に本当の笑顔を見せて欲しくて……。だけど、その悲しげな表情は今もまだ消えてはいない。

今まで過ごしてきた境遇が違い過ぎるアンジェリカと俺達。たぶん俺には今の彼女の心境を理解してあげることはできない。だけど、アンジェリカにとって今の状況が酷なものだということは確かだ。もしかしたら彼女の苦しみは俺の想像を遥かに越えているのかもしれない。アンジェリカがずっと孤独を感じていたこと、それに気付

いたのはあの日彼女の言葉を聞いてから。それまで何も気付いてやれなかった自分が腹立たしい。そして、気付いたところで何もできない自分がもどかしい。こんな想いを抱くなんて本当に俺らしくないと思う。

俺はいつから“アンジェリカ”を護っていたんだろう。初めは“姫”を守っていた。いつもより少しばかり大きなこの仕事。成功させれば多くのものを得ることができるだろう。だけど、俺は地位も名誉も莫大な報酬にも興味はない。彼女を護る理由はただひとつ。これが仕事だから。ただそれだけ。そのはずだった。だけど、気付けばどうだ。今俺が護っているのは黒薔薇姫ではなく、アンジェリカ＝ローゼンノワールというひとりの少女。今まで誰かを護りたいだなんて感情を抱いたことのない俺はこの感情をただ持て余すばかりで――。

――俺は、どうしたらいいのかな……？

騎士の想いになど気付かず、姫君は自ら孤独という名の奈落へと落ちてゆく。すれ違う想い。交わる時は訪れるのだろうか――。

第四章　?. 紅薔薇の歌姫

響く歌声。大樹の陰に身を隠し、私はただ一点を見据える。私の視線の先には真紅のドレスを纏った少女がひとり。地に腰を下ろし、小さな唇で美しいメロディーを奏でる。艶やかな黒髪がふわりと風に舞い、肩の上で揺れた。辺りに彼女以外の人影は見当たらず、その余りにも無防備な姿に疑念が募る。だっておかしいじゃない。こんな目立つ場所でたったひとり、あれではまるで殺してくれとでも言っているかのよう。彼女が私と同じ立場の人間ならば――。どう考えてもこの状況は異様だ。

――戻ろう。

辺りがうっすらと明るくなった頃、目を覚ました私。固い地面に座り込み、固い幹に背中を預けるという最悪としか言えない条件下で眠ったせいか身体の至る所に鈍い痛みが走る。――最悪。贅沢言ってられないのはわかっているけれど、そんな言葉が思わず口から零れた。ゆっくり立ち上がり、身体を大きく伸ばす。

ふと隣を見れば、自分から見張っていると言い出したはずのアシルまでもが小さく寝息を立てていた。ダメじゃない、なんて心の中で呟く。だけど、本気で責める気なんて毛頭ない。だって、彼も疲れていることくらい百も承知だから。ふたりがこんな状態では動くに動けない。だからと言って疲れているであろう彼らを起こすなんて私にはできない。何もすることがなく手持ち無沙汰になってしまった私は元いた場所にもう一度座ろうと膝を屈めた、その時だ。何かが聞こえた。それは耳をつんざくような銃声や甲高い金属音ではな

く――。

微かに聞こえた歌声。聞いたことのない、されど耳に心地良く響く旋律。不意に好奇心が芽生えた。この時の私は何を思ったのだろう。気付けば私はその声を追っていた。

そして、私達がいた場所からさほど離れていないこの場所で私はこの異様な光景を目にすることとなった。今すぐに引き返すのが賢明だろう。あの子が本当にひとりだとは限らない。彼女の騎士達が獲物を狙い、近くで息を潜めている可能性だってあり得る。そう、これは罠かもしれないのだ。それにユノとアシルが目を覚ます前に戻らなくては彼らに心配をかけてしまう。いや、私が傍にいないと知ったらそれだけでは済まないかもしれない。不安、焦燥。急にそんな感情が込み上げ、私は踵を返した。来た道を戻ろうと足を踏み出したその時――。

「わッ――！」

焦りから気持ちばかりが先走る。足下の注意が疎かになり、大樹の根に躓いてしまった。思わず上げた声に全身が一気に強張る。

「……誰？」

歌が止み、少女が振り返る。私よりも深い青の瞳と視線がぶつかった。沈黙の中、震える足で一歩また一歩と後退る。木の葉や小枝を踏む音がやけに大きく響いた気がした。今すぐ走って逃げてしまいたい。だけど視線を外すのが、背を向けるのが、怖い。

「……ねぇ、君もひとり？」

不意に発せられた彼女の声にびくりと肩が跳ね、足が固まる。パニック状態の頭。彼女の言葉が意味のない音のように通り過ぎていく。何を言われたのかすぐには理解できなかった。答えを待つかのように少女は私の瞳をじっと見つめる。何も言うことができない唇、困惑に染まる瞳。いつまでも口を開かないでいると突然少女が立ち上がった。真紅のドレスを揺らしこちらに歩み寄る。渇いた喉から引きつった声が漏れた。

遠くで見ていた少女はもう目の前に。彼女の白く華奢な腕が私に向かって伸ばされる。思わず目を閉じた次の瞬間、優しく手を握られた。

「私、アイリス＝ノワゼット。君は？」

瞳を開ければ、そこには柔らかな笑みを浮かべる少女の姿があった。

「……ア、アンジェリカ＝ローゼンノワール……」

掠れた声でただそれだけ呟くと彼女は笑みを深め、優しく囁いた。

私は君の敵じゃない、と――。

†

「……ねぇ、ひとつ聞いていい？」

真紅の少女――アイリスの隣に腰掛け、彼女に問う。なぁに？　とアイリスは小首を傾げた。

「どうしてひとりで歌なんか……」

アイリスが紅薔薇姫であること。戦闘でふたりの騎士を失ったこと。騎士達が庇ってくれたおかげで彼女だけは生き延びられたこと――。あの後、アイリスが全て話してくれた。罠なんかじゃない、彼女は本当にに独りだった。それなのに何故？　見つけたのが私でなかったらアイリスは今この世に存在していなかったかもしれない。

「私、歌うの好きなんだ。どうせなら最期は好きなことして死にたいから」

笑顔で答えるアイリス。彼女の答えを聞いた私はどんな表情（かお）をしていただろう。

「な、なんてこと言うのよッ！　死ぬ、だなんて……！」

「ねぇアンジェリカ、このゲームのルール覚えてる？　私が生き残るためにはこうしなきゃいけないんだよ？」

突然、アイリスの顔から表情が消えた。片手に握られた拳銃。銃口が私の額にあてられる。引き金に指がかけられ、私は思わず目を瞑った。

「バァンッ！　……なんてね。ごめん、びっくりした？」

アイリスはいたずらっぽく笑い、懐に拳銃をしまった。治まらない鼓動。一瞬、本気で殺されるかと思った。

「武器はある。だけど、使いこなせなきゃ意味はない。騎士を失ったお姫様が生き残れる可能性はゼロだと言っても過言じゃないよ」

アイリスはまるで他人事のように言い放つ。彼女の言っていることは確かに間違ってはいない。もし自分がアイリスと同じ立場に立った時、生き残る自信があるかと問われれば私はノーと答えるだろう。だけど、例え厳しい状況だとしても自分の死を前にして何故アイリスはこんなにも落ち着いていられるのか私にはわからない。

「死ぬのが、怖くないの……？」

「怖くない、というか……私には失うものがないから――」

率直な疑問。返ってきた答えはとても悲しく――。悲しみを帯びた瞳。アイリスの儚い笑みが胸に深く深く突き刺さった。

――アンジェリカ、貴女には教えてあげるよ。きっとこんな話がで

きるのは貴女が最後だから。私の話、聞いてくれるよね？

?. 赤の記憶

――私がまだ高校生だった頃、何でもない日常が何よりの幸せだと気付いたのは全てを失った後でした。

＋――…＋†＋…――＋

「行ってきまーす！」

スクールバッグを片手に家を飛び出した私。外に出ると晴れ渡る空がどこまでも続いていた。雲ひとつない快晴。気持ちの良い風が頬を撫ぜた。

「アイリス！　忘れ物よ！」

聞き慣れた声が響く。振り返ると桃色の包みを差し出す母の姿が。

「あっ、お弁当！　ありがと、じゃあ行ってきまーす」

「気を付けてね」

「おねえちゃん、いってらっしゃーい」

微笑む母さん。その隣で年の離れた弟が小さな手を振る。私が手を振り返すと弟はもう一度私を呼び、その手を高く掲げて小指を立てた。

「かえったら、やくそく、だからねー！」

「うん、約束ね」

私も同じように真っ青な空に小指を掲げる。もう何度目になるだろうか。朝、玄関の前で交わす私達の指切りのサイン。可愛らしい笑みを浮かべた弟に私はもう一度手を振り、学校へと歩を進めた。

いつも通りの朝。特別なことなんて何もない。こんな日常が明日も明後日も、この先ずっと続くものだと信じて疑わなかった。それなのに――ねぇ、誰がこんなこと想像できた？　まさかこれが家族と交わす最後の言葉になるなんて――。

†

「終わったー！　あー、疲れたー」

授業チャイムと同時に隣に座る少女が目を覚ます。彼女は最早枕と化していた教科書やノートをいそいそと片付け始めた。

「ベティったら殆ど寝てたくせに疲れたはないでしょー」

呆れ顔でそう返せば私の友人――ベティは自慢気にノートを差し出す。そこには綺麗に写された文字が並んでいた。いつもそう。授業は大して聞いてないくせにノートだけはバッチリで。その上、要領がいい彼女は成績も悪くない。……何だか悔しい。

「あっ、そうだ！　ねぇアイリス、今日これから空いてる？」

不意に何か思い付いたようにベティは私に問い掛ける。大した用事はない、と答えると彼女はその大きな瞳を輝かせた。

「この間ね、すっごく可愛いカフェを見つけたの！　そこのケーキが絶品なんだって！　ねぇ、これから行こうよー」

嬉々として話すベティ。期待の眼差しが私に向けられる。

「しょうがないなぁ。ベティがどうしてもって言うなら行ってあげてもいいよ？」

「本当は行きたいくせに素直じゃないなー」

ベティの言う通り。甘いものに目がない私がそんな話を聞いて断れるはずがない。――帰ったら遊んであげる、駄々をこねる弟と交わした約束。だけど、偶には寄り道してもいいよね？　明日は早く帰るから、なんて心の中で謝りながら私はベティと共に学校を後にし

た。

「わぁっ、すっごい可愛いじゃん！」

「でしょー！」

学校から歩くこと約十分。辿り着いた先にあったそれはまるで――。

「お菓子の家みたい！」

屋根はビスケット、扉はチョコレート。勿論作り物だけど、それは小さい頃に絵本で見たお菓子の家そのものだった。子供みたいにはしゃぐ私達。やっぱり女の子だもん、こんな可愛いカフェを目の前にしたらやっぱりテンションだって上がる。早く入ろうよ、とベティに促され私達は店の扉を潜った。

賑わう店内。女の子達の楽しげな声が飛び交う。私達も席に着き、美味しそうなケーキやタルトの並ぶメニューに目を通した。――どれにしよう？　優柔不断な私達は暫くの間メニューとにらめっこを繰り返す。散々悩んだ挙げ句ベティはイチゴタルトとミルクティー、私はミルフィーユとレモンティーを注文した。

「これおいしい！」

「ねぇ、一口交換しようよ」

運ばれてきたケーキ。一口食べれば口の中いっぱいに甘い幸せが広がる。その美味しさに思わず頬が緩んだ。甘いスイーツに美味しい紅茶、自然と会話も弾み、気付けば私達はお喋りに夢中になっていた。話題は尽きることを知らず、楽しい時間はあっと言う間に過ぎ去っていく。気付けば窓の外は宵闇に染まっていた。

「そろそろ帰ろっか」

ガラス越しに日の落ちた街を見て私達は席を立った。会計を済ませ、店の外に出ると厚い雲に覆われた空が私達を出迎える。雨が降りそうだなんて思った矢先、ポツリポツリと空から雨粒が落ち始め、地面に小さな染みを作った。

「うわぁ、雨降って来ちゃった……」

次第に強さを増していく雨を見て傘がないと騒ぐベティ。その隣で私は折り畳み傘を取り出した。それを見た彼女は私の腕を掴み、入れてくれとせがんだ。

「えー、ベティの家、私と反対方向でしょ」

「この雨の中友達を置いていくのっ！？」

「走れば大丈夫じゃない？」

軽くあしらえば薄情者、鬼だなんてベティは散々なことを言ってくれる。そんな彼女に私が傘を差し出すとベティはきょとんとした顔でこちらを見返した。

「うそ。ほら、送ってあげるから感謝してよね？」

「さすがアイリス！　ありがとう助かる！　やー、アイリスは本当優しいなぁ」

「さっきまで真逆のこと言ってたくせに調子いいんだから……」

小さな傘の下、ふたり身を寄せ合い街灯に照らされた夜道を歩く。強さを増す雨がしきりに傘を叩いた。ベティの家に着いたのは歩き出してから数分、靴に雨水が染み込み始めた頃だった。門の前でベティと別れの言葉を交わし、玄関へと続く石畳を駆けていく彼女を見送る。そして私は先程歩いて来た道を引き返し始めた。住宅街から少し外れた、喧噪を知らぬその場所に私の家はある。足早に追い抜いていく人々を見送りながら私は家へと続く道を黙々と歩いた。

曲がり角に差し掛かる直前、私はふと気付いた。

雨音に混ざる人々のざわめき。それは曲がり角の向こう、私の家の方向から聞こえてくる。何かやっているのかな。考えてみればいつもより人通りも多かった気がする。この時はまだ他人事。それ程気にも留めず、私はその曲がり角を右折した。

異変に気付いたのはその直後。少し遠くに見える赤く光る我が家、その周りに群がる人、人、人。ただ事ではないことくらい誰にだってわかる。サァーっと血の気が引き、気が付けば私は傘を投げ捨て駆け出していた。群がる人々を掻き分け、そこで目にしたものは—

|。

何が起こっているのか理解できなかった。いや違う、目の前の事実を受け入れることができなかったんだ。そこから先の記憶は靄がかかったように曖昧でよく覚えていない。

?. 天使の仮面

「火事だった。家の中から三人の焼死体が見つかって、それは父さんと母さん、そして弟のものだった。ひとりになった私は親戚の家に預けられたんだけど、そこに私の居場所はなくて……。だから私はバイトしてお金貯めて、高校卒業と同時に一人暮らしを始めた。本当は音楽の勉強をしたかったんだけど、そんなお金ないから諦めたの……」

私はただ黙ってアイリスの話を聞いていた。当たり前だと思っていた日々。華の国に来てそれがいかに幸せなことだったのかを知った。私と同じ立場だと思っていたアイリス。しかし、彼女の“当たり前”はもう随分前に奪われていて……。私はとても恵まれていたのだと改めて思い知らされたように思えた。

「親戚の家は私が住んでいた街からだいぶ離れた地域にあったから友達とも疎遠になっちゃって……。私には何も残っていないんだよ。私がいなくなって困る人も悲しむ人もいない。だから私は死んだって構わない。それに天国では家族が待っている。そっちに行った方が私は幸せなのかもしれない……」

「違うッ！」

アイリスの言葉に私は思わずそう叫んだ。どうしても黙っていられなかった。今まで静かだった私が突然声を荒げたことにアイリスは驚いたように目を見開く。

「違うわ、アイリス！　貴女が死んだら天国のお父様やお母様それ

に弟さんが悲しむわ。アイリスは生きなくちゃ。亡くなった家族の分も。それに私は悲しい。せっかくこうして知り合えたのにアイリスがいなくなってしまったら……」

人の死を経験したことのない私が、最愛の家族の死を目の当たりにしたアイリスにこんなことを言っても全く説得力がないことなんてわかっていた。だけど、アイリスは間違っている。どんなことがあったって自ら死を望んではいけない。

私の言葉にアイリスは何を思っただろう。何もわかっていない、と彼女の怒りを買ってしまったかもしれない。しかし、そんな私の心配とは裏腹にアイリスはふっと優しい笑みを浮かべ、自らの手を私のそれに重ねた。

「アンジェリカは優しいね。だけど、私よりも君のような子が生き残るべきなんだよ。アンジェリカには家族がいるでしょ？　生きて帰らなきゃいけないのはアンジェリカの方だよ。そのためには私が生きていちゃいけない。いい？　生き残れるのはひとりだけなんだよ？　薔薇姫の生まれ変わりがふたり以上生きている限りこの争いは終わらないんだよ？」

「でもッ……！　何か方法があるかもしれないじゃない！　みんなで生き残れる方法が……。最初から諦めちゃダメよ！」

諭すようにアイリスは言う。私はそれを跳ね除けるかのように強く言い返した。ここに連れて来られた当初は怯えるばかりで弱気だった私がこんなこと言うなんて自分でも信じられない。今だって恐怖と不安は拭えないけれど、私は強く思った。アイリスと共に生き残りたい。薔薇姫達と共に生き残りたい。私達は帰らなくては、生きなくてはいけない。どんな状況下だって死を望んではいけない。

「アンジェリカは本当に優しいね。ねぇアンジェリカ、ひとつお願い」

なぁに？　と問えば、アイリスは私の方に向き直り、重ねた手をぎゅっと握り締めた。

「私と、友達になってくれる？」

「……？　やだなぁアイリス、私達もう友達でしょう？」

一瞬アイリスはきょとんとした表情を見せた。しかし、私の言葉を認めると彼女はふわりと笑った。

「ありがとう。……でももうお別れみたいだね。最期にアンジェリカに会えてよかった」

「アイリス、何言って……」

パァンッ

私の言葉を遮るように銃声が響いた。隣に座るアイリスの身体がゆっくりと傾き、地へ倒れる。彼女の胸に赤黒い染みがじわりと広がり、真紅のドレスを汚した。

「……ア、アイリス……」

彼女の肩を小さく揺らすも反応はない。私の錯覚か、暖かいその手

から急速に熱が奪われていくような気がしてならなかった。動かない。隣で微笑んでいたのがまるで嘘のように少女はもう動かない。

「探しましたよ、アンジェリカ」

不意に影がかかる。もう随分聞きなれたその声に顔を挙げるとそこにはユノの姿があった。行きましょう、と差し出される左手。銀色の銃を握る右手。アイリスを殺したのはユノ……？　それを認めた途端、私に向けられるいつもと同じその微笑みがまるで張り付けた悪魔の笑みに見えた。怖い、怖い、怖い――。

「……やッ、来ないで……！」

――人殺し。

差し出されたその手を振り払い、私は一歩、また一歩と後退する。走り出そうとユノに背を向けた瞬間、彼が私の腕を掴み、それを阻んだ。

「アンジェリカッ！」

「嫌！　放してッ！」

掴まれた腕を力いっぱい振れば、その手は思ったよりも簡単に解けた。そのままの勢いで私はそこから逃げ出した。後ろから制止の声が聞こえたけれど、私はそれを振り切ってただ走り続けた。

共に生き残る、心にそう誓ったのにそれは一瞬で奪われた。――人殺し、人殺し、人殺しッ！　不意に涙が溢れる。それは悲しみか、それとも恐れからか――。わからない。わからないけれど、まるで

せき止めていたそれが一気に流れ出すかのように涙は止まることを知らず、私の頬を濡らし続けた。

人の命なんて脆く壊れやすい。儚く散った紅薔薇姫。次に散るのは何色の薔薇？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1711e/

薔薇姫―story of the black rose―

2011年11月18日06時50分発行